

Opera

● 礼拝堂を舞台に新たな国民オペラ、平井秀明《かぐや姫》上演

2012年、ザルツブルクなどでの公演が決定しているオペラ《かぐや姫》を所見した(11月3日)。と言っても通常の劇場ではなく、渋谷駅から8分ほどの聖ヶ丘教会の礼拝堂を、そのまま舞台にしての公演だ。中央通路、また舞台上手側の一角にも補助席を出すほどの盛況。田尾下哲の演出は、客席の後ろにも人物を登場させ、正面の舞台との間を中央の通路で繋ぐ。従って平安朝風衣裳の歌手たちは、みずから客席の中で歌うようになり、鍛えられた声が直接観客の耳に届くわけで、これは一般の方にとっては滅多にない素晴らしい体験だったと思う。また前記のようにいわゆるセットはなく、わずかな小道具、照明も大ざっぱに言えば明暗のみ、また支える楽団も下手側に位置した5人のみだが、見事に書き込まれた音楽と作曲者自身の精密な指揮で、大きな成果をあげていた。かぐや姫を演じた永安淑美、翁の立花敏弘、姫役の菅有美子のほか、姫の心を掴む帝の豊島雄一、また求婚する車持皇子の布施雅也、中納言の清水良一、大納言の中原和人、石作皇子の谷川佳幸、滑稽な公家の晴雅彦、姫の恋敵役九嶋香奈枝など、10人の登場人物がそれぞれに特色を出し、姫が竹藪の中で発見されてから、成長、恋、そして月の世界へ戻って行くまでを美しく描いてくれた。それぞれに個性を占めるアリア、それらを組み合わせしていく音楽の力は見事。一方、小野敏夫を団長とする「かぐや姫合唱団」、同児童合唱団も大健闘で、子供から大人、老人に至る幅広い聴衆を喜ばす、素晴らしい国民オペラの誕生に感動した。(三善清達)



《かぐや姫》より、(左から)永安淑美、立花敏弘(翁)、菅有美子(姫)

古典から現代までの幅広いレパートリーを持つ下野戸亜弓が、文化庁芸術祭参加公演として3年ぶりに東京でリサイタルを行った(11月2日・王子ホール)。山田流箏曲の演奏家である下野戸の最大の魅力は、その歌にある。単なる邦楽の地唄という領域に留まらず、その歌唱は大きな可能性を持っている。「言葉と音楽との対話」と題された今回のプログラムは、光崎検校《秋風の曲》という古典に始まり、柴田南雄《狩の使》、諸井誠《秋の琴〜もうひとつのレクイエム》(委嘱初演)、下野戸の自作《万葉の恋歌》という意欲的なもので、すべて下野戸1人の弾き歌い(柴田作品は三絃、それ以外は箏で、諸井作品は箏を2面を使う)という完全独演形態。下野戸の歌声は、洋楽の耳の我々にも快い美しい共鳴を持っている。その美しい声は、テキストのドラマの陰影を鋭敏に感得し、流麗なディクションによって、美しい音と言葉の世界を紡ぎ出して行く。プログラムの進行に伴い、その声と言葉の生み出す世界は集中力を増し、客席を魅了する。諸井自身が中村稔の詩を再構成した新作は、別々に調弦した箏2面をL字型に配置し弾き歌う作品。円熟の境地の諸井の作品は、強い集中力と精神性を求めるもので、下野戸は作品に対峙し、その世界の深みを入神の演唱で具現した。幸福な初演であった。諸井作品の後の下野戸の自作の愛らしさは、張りつめた会場の空気に安らぎを与えた。凝縮性の高い一夜であり、充実した時間が流れた。(國土潤一)



下野戸亜弓リサイタルより(11月2日・王子ホール)



宗教音楽に関する連続セミナーのホストを務める神尾氏(左)。右はこの日のゲスト、宗教音楽の大家である保橋樹氏(11月8日・音楽の友ホール)

開催された(11月8日、15日・王子ホール)。

11月8日は宗教音楽の大家である保橋樹氏の「宗教音楽の泉」でもおなじみの皆川洋之氏の「聖歌の成立とその転用が前半のグレゴリオ聖歌《Dies irae, day of Wrath》のメロディがベルリオーズの《幻想交響曲》、リストの《死の時間》、メンデルソーンの《化石》など、多岐にわたる家によって死のテーマとして転用された実例が紹介された。また保橋氏の「隠れキリシタンたち」の間で聖歌の継承が行われ、その結果《O Domina》がオラショ《ぐるりよ、主よ》に化し、メロディも変化してきた。その源により示され、興味深いお話が聞かれた。15日のゲストは東京女子大学教授の保橋樹氏。まずナチのドイツ至上主義者ワーグナー音楽の疾風怒濤的な展開の要素、官能への陶酔がアウシュビッツなどでの極限状況を助長し、その上で音楽好きなドミトリー・ポポフ音楽家との一種の交流がアウシュビッツで行われたこと、20世紀の音楽への愛情とその奥底に潜む愛が音楽隊をめぐって繰り広げられたことなどが語られた。スターリニズム弾圧されたロシア人宗教音楽家ニコライ・メロニコフ氏も紹介され、深刻ではあるが根源的開かれた。2つの講座とも興味深い話で、活発な質問も相次いだ。



● Seminar 音楽之友社70周年記念企画「ヨーロッパ音楽の源流をたずねて」開催